

アーツカウンシルしずおか
文化芸術による地域振興プログラム
原泉アートプロジェクト
事業評価報告書

2022 年 3 月

目次

評価結果の要約	3
1. 対象事業：原泉アートプロジェクトの活動	6
1.1 事業の背景・経緯	6
1.2 事業の特徴	7
1.2.1 アーティストが地域で様々な影響を受けながら制作活動を進める AIR プログラム	7
1.2.2 地域資源を活用した絵画・彫刻・インスタレーション・パフォーマンス	8
1.2.3 地域振興を目的としていない地域のアートプロジェクト.....	9
1.3 事業の実施体制	9
1.4 活動の実績（2018 年～2021 年）	10
2. 事業評価の設計	12
2.1 評価目的（何のための評価か？）	12
2.2 評価設問（評価を通じて何を知りたいか？）	12
2.3 評価の実施プロセス.....	12
2.4 評価の制約	13
2.5 事業の成功している姿とセオリーオブチェンジ	13
3. 評価結果.....	16
3.1 アーティストが感じた価値と作品の影響.....	16
3.2 原泉アートプロジェクトを実施したことによる地域の変化.....	19
3.2.1 地域資源の有効活用の状況.....	19
3.2.2 地域住民がアート活動に見出した価値	23
1.3 原泉アートデイズ!来場者が感じた価値	27
4.1 評価結果のまとめ.....	30
4.2 今後に向けての提言.....	30

本評価について

- ・ 本評価は原泉アートプロジェクトの活動によってもたらされた変化が、地域や個人に対してどのような価値を創出しているのかを明らかにするものである。
- ・ 原泉アートプロジェクトの作品の芸術性を評価するものではない。

評価結果の要約

原泉アートプロジェクトは、静岡県掛川市北部の自然豊かな中山間地域である原泉地区において、現代アート作品を制作するアーティストによる滞在制作と、制作された作品の地域資源を活かした展示を行う「原泉アートデイズ!」の開催までの一連の活動を包含する事業である。事業の舞台となる原泉地区は掛川市でも特に深い緑と原野谷川上流の清流に恵まれた地域だが、近年は若者世代の人口流出もあり、少子高齢化・過疎化が地域の課題となっている。

本事業はアーツカウンシルしずおか「文化芸術による地域振興プログラム」の先行プログラムである静岡県文化プログラム「地域密着プログラム」から2019年度、2020年度と助成を受けており、本年度のアーツカウンシルしずおかによる助成を含めると3年間継続して資金的支援を受けている。このことを踏まえて、下記の評価目的を達成するために事業評価を実施した。

- 原泉アートプロジェクトの成果、特にアーティスト・イン・レジデンス（以下、AIR）のプロセスと価値（成果）を可視化し、関係者や外部の関心層に広く発信する根拠を収集する。
- 原泉アートプロジェクトを実施することによって、関わった関係者の間や地域住民で起きた変化を明らかにする。
- 原泉アートセンターの持続的な展開に向けての提言を抽出する。

上記評価目的を果たすために、本件評価は下記4つの評価設問に対して答える形で設計した。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 参加アーティストが原泉アートプロジェクトでの滞在制作（AIR）で体験したこと、また感じた価値は何か？それが作品の質にどの程度影響（質を高めたり、変化させたり）を及ぼしたか？2. 原泉アートプロジェクトを4年間実施したことで、地域・地域の関係者はどの程度変化したか？3. 原泉アートデイズ!の来場者（一般の人、アート関係者）が感じた価値は何か？4. 原泉アートプロジェクトを継続し、ひいてはアートセンターとして持続的に発展するにはどのような提言が抽出できるか？ |
|---|

以下、評価結果を評価設問ごとにまとめる。

1. 参加アーティストが原泉アートプロジェクトでの滞在制作（AIR）で体験したこと、また感じた価値は何か？それが作品の質にどの程度影響（質を高めたり、変化させたり）を及ぼしたか？

AIRの参加アーティストに関しては、「アーティストにとって、原泉AIRに参加することが、作家人生において大きな転機となる」状態であり、想定していた成果の達成度合いとして最高の状態であることが確認された。アーティストに対しては、AIRの実施においてアーティストの成長を促す事業側の様々な仕掛けが功を奏したことが挙げられる。また、アーティストは、AIRにおいて感じた価値は多岐にわたったが、新たな制作スタイルに挑戦できたなど、作品にも大きく影響が表れた。

2. 原泉アートプロジェクトを4年間実施したことで、地域・地域の関係者はどの程度変化したか？

原泉アートデイズ!の実施の結果、稼働していない地域資源の有効活用度は「アートデイズ!の期間中にいくつかの空き施設がアートに活用されている状態」であることが確認できた。また、地域住民も「アート活動の存在が日常（当たり前）になり、自分たちの日常と並行して受け入れられる」状態になっている。これらの成果を促進させた要因は、事業が地域住民と丁寧な関係構築を行い、適度な距離感を守りながらも信頼関係を築けているところにある。これらの成果に

加え、地域の関係者は様々な価値を見出していることも本件評価で確認できた。地域の関係者への提供価値においては、「アート作品そのものに対する価値」「アーティストとの交流における価値」「アートイベントを開催することによって地域で感じる変化」と三つにわけて分析した結果、アート作品そのものよりは、アーティストとの交流やアートイベントを地域で開催することのほうに地域住民が価値を感じていることが明らかになった。

3. 原泉アートデイズ!の来場者（一般の人、アート関係者）が感じた価値は何か？

一般来場者が感じた価値の確認は本件評価では重要と考え、原泉アートデイズ!期間中（2021年10月14日～11月28日）に合わせて一般来場者対象のアンケート調査と現場でのヒアリング調査を試みたが、限定的なデータしか収集できなかった。その中でも、原泉アートデイズ!を鑑賞して、アート活動の可能性や希望を見えたというコメントや、アートの見方の変化、たくさんの表現への気づきなどが促されたという反応が、一般来場者からも得られた。また、原泉アートデイズ!を鑑賞した先に地域やアートに関してどのような考えを喚起したかを確認したところ、アーティストや現代アートへの関心と同程度に、原泉地区自体のことや地域について関心が高まったことも判明した。

4. 原泉アートプロジェクトを継続し、ひいてはアートセンターとして持続的に発展するにはどのような提言が抽出できるか？

本件評価の結果を踏まえ、原泉アートプロジェクトを継続し、ひいてはアートセンターとして持続的に発展するためのという視点を中心に、事業に向けての以下4つの提言をまとめた。

提言1：地域住民に、アート作品の理解促進のための機会を積極的に提供し、地域住民の中でファンを増やす。

地域住民が見出す以下3つの価値「アート作品そのものに対する価値」「アーティストとの交流における価値」「アートイベントを開催することによって地域で感じる変化」のうち、アート作品そのものに対する価値や魅力が、相対的に見出されておらず、住民の関心も低くとどまっていることが本件評価で判明した。地域住民を意識したアート作品についての情報発信を行うことで、より多くの地域住民のアート作品への理解と関心が変化すると考える。

提言2：地域と世界が交差するアートセンターをめざす。

海外のアーティストをAIRに招待し、制作活動をサポートできる体制が整備されていることが本事業の強みであり、この部分を意図的に拡大していくのもアートセンターの意義を高めていくことにつながると考える。新型コロナウイルスによる渡航制限の解除のタイミングにもよるところがあるが、次年度以降は原泉アートプロジェクトと互恵的な関係性を築ける海外のアーティストとのつながりを増やし、それに向けて積極的に情報発信を行い、海外アーティストをAIRに招致できる体制を整えるのも、アートセンターの発展を促進させるきっかけになることが期待される。

提言3：子どもとのコラボレーションを増やす。

原泉アートプロジェクトと子どもたちとの相性は非常に良い。そしてそれは、必ずしもアート鑑賞、アート制作に限定せず、様々な関わり方からの成長の糧となり得る。対象は公立の学校などに限定せず、子ども関連施設、例えば学童保育所や児童館の夏休み企画をねらったり、中高の文化部活を対象としたり、週末に親子でアートを体験できるイベントを企画するのも、アートセンターの利用者を増やすきっかけとなりうる。アートを鑑賞するだけではなく、自ら体験したり、アートイベントを支える経験を積める場所として、子どもたちの今後の人生において何かしらの好影響を与えるような

様々な機会を提供する。そして原泉地区、原泉アートプロジェクトに対して思い出、そして思い入れをもってもらえる将来の大人たちをより多く現行の活動に巻き込むことが鍵と考える。

提言 4：事業の発展的運用のためにも、事務局を強化する。

事務局のスタッフや事業運用のための人的資源については、事務局側も既に課題認識を抱えており、様々な方策が検討されている。この人材不足の点は、AIR のアーティストからも指摘されているところであり、本事業の持続性を左右する重要課題でもある。今一度原泉アートプロジェクトを「事業」ではなく「組織」ととらえ、業務の棚卸しをし、事務局としての優先事項と必要な人材のプロフィールを作成し、給与確保のための収入について検討する期間を設け、事業を一旦止めてでも、人材確保に注力することも、本事業の持続的発展に必要不可欠なプロセスであると考え。

1. 対象事業：原泉アートプロジェクトの活動

1.1 事業の背景・経緯

原泉アートプロジェクトは、静岡県掛川市北部の自然豊かな中山間地域である原泉地区において、現代アート作品を制作するアーティストによる滞在制作と、制作された作品の地域資源を活かした展示を行う「原泉アートデイズ!」の開催までの一連の活動を包含する事業である。事業の舞台となる原泉地区は下記図 1 にあるとおり、掛川市でも特に深い緑と原野谷川上流の清流に恵まれた地域で、大和田、孕丹、萩間、居尻、泉の 5 つの地区で構成されている。地域の歴史は長く、住民は伝統的には林業やお茶の生産に携わってきたが、若者世代の人口流出¹もあり、少子高齢化・過疎化が地域の課題となっている。

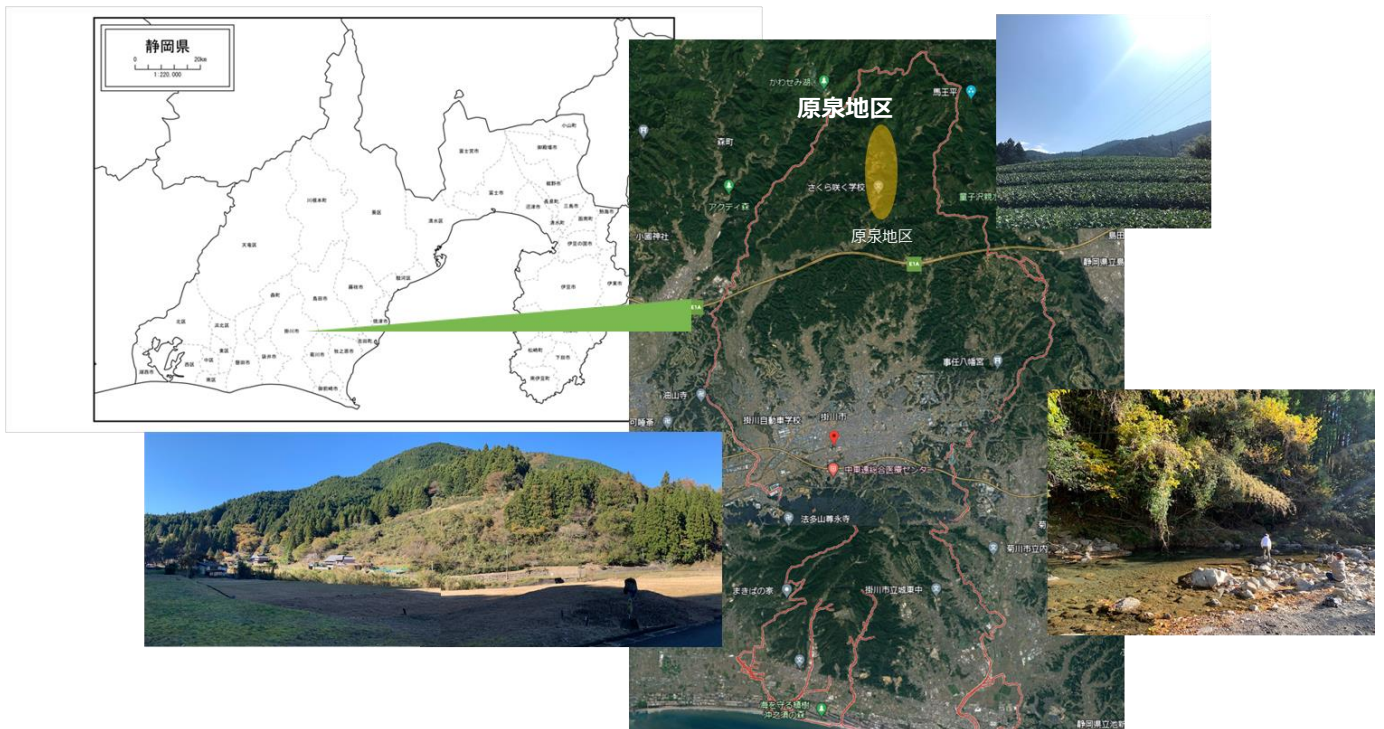


図 1 原泉アートプロジェクトが開催されている自然豊かな掛川市原泉地区の位置と風景

原泉アートプロジェクトが始まった経緯としては、以下が挙げられている。同じ掛川市内で、静岡県文化プログラム地域密着プログラムの助成先でもあった芸術祭「かけがわ茶エンナーレ」が 2017 年 10 月から 11 月に開催された。「アート x 茶・茶文化」の視点から掛川市内の多様な地域発信のアートプロジェクトを企画した中、原泉地区内の施設である「さくら咲く学校（旧原泉小学校）2」で活動していたアーティストを中心に、原泉地区がエリアのひとつとして参加することとなった。その際運営の担い手として声がかかったのが、その前年から原泉地区に移住していた、現原泉アートプロジェクト代表の羽鳥祐子氏だ。羽鳥氏は当時、「さくら咲く学校」にアトリエと教室を構える現代美術家の中瀬千恵子氏と出

¹ 原泉地区は掛川市の中でも最も人口が少ない地区でもある。2020 年度のデータによると、182 世帯 人口 500 人弱。

² さくら咲く学校とは原泉地域立の施設で、地区の廃校した小学校跡を有効活用しながら、地域の人々が集い、活動し、交流する場として運用されている。協働事業者（テナント）も地域内外から募集され、原泉アートデイズ!のアーティストである中瀬千恵子氏や団体のメンバーもここを拠点として活動している。

会、中瀬氏が過去にマケドニアで体験したような本格的なアーティスト・イン・レジデンス（以下、AIR）プログラムと一緒に立ち上げようと意気投合したことから、改めて 2018 年 3 月に「原泉アートプロジェクト」という団体を立ち上げた。同年 8 月から初めての AIR を開始し、その作品が展示された「原泉アートデイズ!」が 10 月に初めて開催された。以後、2019 年から 2021 年まで、毎年開催している。本事業はアーツカウンシルしずおか「文化芸術による地域振興プログラム」の先行プログラムである静岡県文化プログラム「地域密着プログラム」から 2019 年度、2020 年度と助成を受けており、本年度のアーツカウンシルしずおかによる助成を含めると 3 年間継続して資金的支援を受けていることとなる。

1.2 事業の特徴

評価対象事業である原泉アートプロジェクトの特徴として、以下 3 点が挙げられる。

1.2.1 アーティストが地域で様々な影響を受けながら制作活動を進める AIR プログラム

原泉アートプロジェクトの中核を成すのが、アーティスト・イン・レジデンス（以下、AIR）プログラムだ。AIR の定義として、以下がいえる。

「アーティストが一定期間ある土地に滞在し、常時とは異なる文化環境で作品制作やリサーチ活動を行うこと。またはアーティストの滞在制作を支援する事業のこと…ヴィジュアル・アートに限らず、演劇、パフォーマンス・アーツ、ダンス、学術研究など様々なジャンルに対応しており、奨学金の有無、設備、受け入れ条件などは各制度によって異なる。…AIR の実施目的としては、優れたアーティストの創作・生活支援、地域文化の振興、異なる文化を持つ国や地域とアーティストとの交流、情報や人的ネットワークの促進といった利点が挙げられる³⁾」

原泉アートプロジェクトに参加するアーティストは、唯一の参加条件として、原泉地区にて 1 か月程度の滞在期間を設け、作品を制作することが求められている。またその滞在の過ごし方も特徴があるといえる。アーティストは、地域の空き家を再利用したレジデンスに滞在し、様々な場所にて制作活動を行う。1 日 2 回、原泉アートプロジェクトのスタッフが手作りした食事を他のアーティストやスタッフとテーブルを囲み、共に食する。この食事の時間こそが、原泉アートプロジェクトの AIR が最も大切にしていることのひとつである。AIR プログラムは日本各地において開催されているが、こうしたスタイルは珍しく、原泉アートプロジェクトが先駆的な試みとなっている。



写真 1 アーティストが滞在するレジデンスの一つと食事風景

³⁾ 美術手帖 アートウィキ、<https://bijutsutecho.com/artwiki/17>

2021 年度の原泉アートデイズ!においては、特別企画として、この年 AIR 期間中にアーティストが囲んだ食事の情報（日付、食前後写真、メニュー、食材、食べた人）全てを記録し、「レジデンシーミールズ」という一つの作品として展示された。

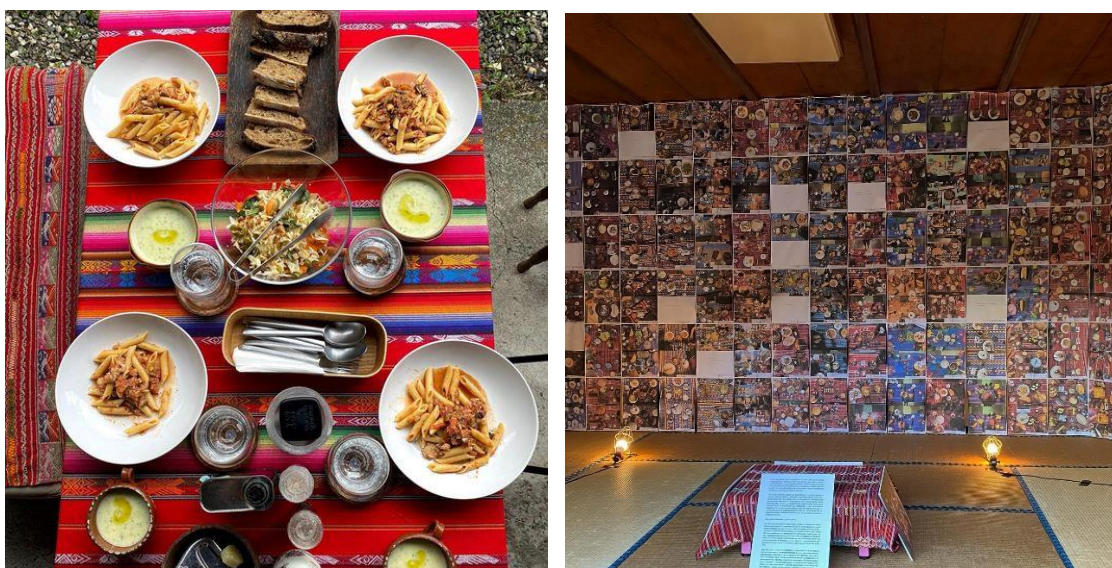


写真 2 アーティストが囲む食卓の様子と「レジデンシーミールズ」という特別展示作品

この展示を企画した「食」の専門家でもある参加アーティストの一人が、専門家の視点からの AIR の「食」についてこう記す。

ぱっかーんと窓を開け放ち、庭のテーブルに中南米っぽいテーブルクロスをかけ、楽しいご飯が並ぶ。いつも同じ時間になると、その時滞っているアーティストたちが集い、味わい、語らい、いただきますとごちそうさまを繰り返す。「Artist in Residence」の醍醐味が、この食卓にあると思う。決して三ツ星レストランのように華やかで手の込んだ料理ではないけれど、とびきりおいしくて、毎日食べても飽きがこない。常にアーティストたちが健やかに活動できるようにと願って作られた、大切な人たちとの関係を深めるための食であり、土地との関係性のなかで生まれている食である。——omedarida 中村優 「レジデンシーミールズ」一部抜粋

毎日の食事を共にすることに加えて、自身が滞在しているレジデンスや、作品の展示会場となっている空き家や空き施設の片づけや清掃はスタッフとアーティスト双方によって行われる。食事や片づけ、掃除などの日常を通してアーティスト同士のつながりが深まるとともに、お互いの作品の方向性についてのディスカッションやインスピレーションを与えあう場と化す。このような場面は、原泉の豊かな自然環境に加え、アーティストの制作活動に大きな影響を及ぼすことが報告されている。

1.2.2 地域資源を活用した絵画・彫刻・インスタレーション・パフォーマンス

AIR で制作された作品は、原泉アートデイズ!期間内において、原泉地区内に点在する複数か所の展示会場にて展示される。これらの展示会場は全て、地域で空き家となった家屋や施設をスタッフ、サポーター、アーティスト、時には地域の方々と一体となって片づけられた後、大切に有効活用されている。

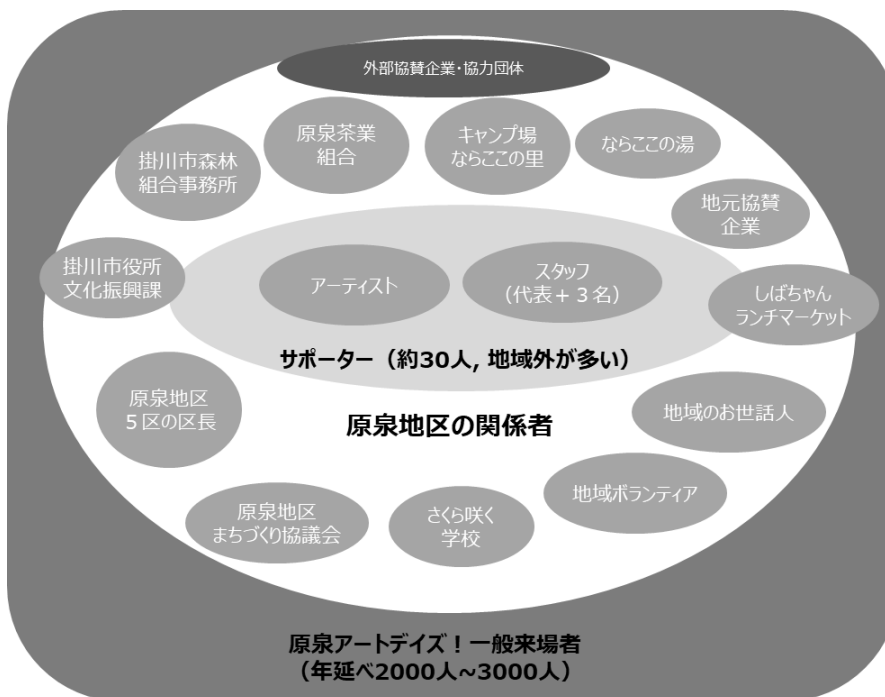
1.2.3 地域振興を目的としていない地域のアートプロジェクト

日本各地で行われるアートプロジェクトで、特に過疎化が進んだ遠隔地において実施される案件の多くは、アートを通じての住民参加や広域連携、地域活性化やまちおこしを主眼におき、ひいては地域の振興を事業目標として掲げる例が少なくない。これらのようなアートプロジェクトとは対照的に、原泉アートプロジェクトは、本事業を通じての原泉地区の活性化や振興をあえて直接的な目的として掲げていないところも事業の特徴だ。

原泉アートプロジェクトやアートデイズ!はそもそも地域おこしに必要とされている住民の主体形成等を前提とした事業ではない。外部から来た羽鳥代表を中心に、国内外のアーティスト等地域外の関係者が、豊かな自然環境や地域資源にふれたり住民と交流した経験をアート制作活動に活かしたりすることで、質の高い作品を世に送り出すことに取り組んでいる。そのため、地域住民との関係性は、事業関係者は外部者として地域に入らせてもらっているという恩恵への感謝とリスペクトを常に持ちつつ、地域住民はそれに対し一定の距離をとりながらも温かく見守っているという構図がみえてくる。

だからと言って原泉地区の中で事業とコミュニティ間のやりとりがないわけではない。むしろ、県外出身の原泉アートプロジェクトの羽鳥代表は、原泉地区内に移住し、地区の会合やまちづくり協議会、また地域の清掃やイベントなどに積極的に参加することによって地域住民と信頼関係を構築している。またこのような信頼関係に基づき、アーティストの制作のための資材や作品の展示のための家屋、あるいはパフォーマンスのための場所を原泉地区の人たちと非常にきめ細かい調整を進めながら融通してもらうことに成功しており、作品と地域の融合の要としての役割を担っている。

1.3 事業の実施体制



本事業の実施体制及び関係者を以下図2に表す。年中を通じて活動を行っている団体にしては、非常にシンプルな構図となっている。中心にるのがアーティスト・イン・レジデンスで原泉にて滞在制作するアーティストたちであり、そのアーティストの制作活動や生活を支え、地域とつながり、原泉アートデイズ!を運営するスタッフがいる。そのすぐ周りには、「原泉アートプロジェクトのファン」であるサポーターが存在している。

図 2 原泉アートプロジェクトの実施体制と関係者

これらサポーターは、事業そのものや原泉アートデイズ!の作品に対して思いを抱えている地域外の関係者が多いが、事業側の声掛けがあった際は、便宜を図ってくれたり、協力してくれたりする強力なネットワークを構成している。それと重なるように、より緩やかではあるが、原泉地区内の層の厚い関係者⁴によっても、本事業は支えられている。例えば地域の空き家や空き施設の活用をするとき、あるいはアート作品の資材を現地調達するとき、あるいは、パフォーマンスのための場所を確保するとき等、その協力事例を挙げること枚挙にいとまがない。こういった地域の関係者は特にアートに関心があるというわけではないが、本事業に協力することがひいては地域のためになるという考えのもとに時間と手間をかけてくれている貴重な存在だといえる。

1.4 活動の実績（2018年～2021年）

原泉アートプロジェクトのAIR および原泉アートデイズ!に参加したアーティストを年度別に列挙した。現代アートといえど、絵画から木彫、造形、インスタレーション、パフォーマンスと多岐にわたる形式の作品が制作・展示／発表されたことが実績をみると改めて把握できる。毎年必ず海外のアーティストも参加している。年度別に参加したアーティストを表1にまとめた。

表1 原泉アートプロジェクトに参加したアーティスト（年度ごと）※順不同

年度	参加アーティスト
2018（12組）	中瀬千恵子（絵画）、近藤愛子（インスタレーション）、北見美佳（絵画）野々上聡人（絵画・木彫）、星 雅治（造形）、水戸部春菜（絵画）、高城木乃香& 小林千夏（モデル・写真・グラフィック）、Kate Krebs（絵画・パフォーマンス）、Yilling Tseng（インスタレーション）、KEBLUJARA production（映像）、Celeste Amparo Pfau（インスタレーション）、Sticky Rice（ダンスパフォーマンス）
2019（10組）	中瀬千恵子（絵画）、Haniel Wides（造形）、北見美佳（絵画）、野々上聡人（絵画・木彫）、ソノチ（演劇）、KEBLUJARA production（映像）、銚井喬（造形）、水戸部春菜（絵画）、芳賀篤（絵画）、ノイズカラー（音楽、パフォーマンス）
2020（12組）	中瀬千恵子（絵画）、Haniel Wides（造形）、北見美佳（絵画）、野々上聡人（絵画・木彫）、ソノチ（演劇）、水戸部春菜（絵画）、安藝悟（音読、パフォーマンス）、下田実来（絵画）、Robin Owings（インスタレーション）、kiritsuaiko（グッズ制作）、Celeste Amparo Pfau（インスタレーション）、銚井喬（インスタレーション）
2021（12組）	中瀬千恵子（絵画）、野々上聡人（彫刻）、ソノチ（演劇）、近藤愛子（インスタレーション）、安藝悟（音読パフォーマンス）、Robin Owings（インスタレーション）、都築透（映像）、Omedarida（中村優・薮下穂）（造形）、井口貴夫（絵画）、みなみりょうへい（インスタレーション）、弓場勇作（絵画）、松島家（誠・礼・花）（パフォーマンス）

原泉アートデイズ!の年度ごとの開催テーマと、開催期間、来場者数を以下表2にまとめる。

⁴ ここでの地域関係者は、一部掛川市中心部から通っているボランティアも含む。

表 2 原泉アートプロジェクト年度ごとの概要

年度	原泉アートデイズ! テーマ	開催期間	来場者数
2018	HARAIZUMI ART DAYS! ～自然と生き物と人の営みと～	2018 年 10 月 13 日～10 月 28 日 (2 週間)	のべ 700 人
2019	HARAIZUMI ART DAYS! ～泉とともに～	2019 年 10 月 24 日～11 月 10 日 (3 週間、火・水休業)	のべ 1,200 人
2020	HARAIZUMI ART DAYS! 2020 ～不完全性～	2020 年 10 月 15 日～11 月 15 日 (1 か月、月・火・水休業)	のべ 1,500 人
2021	HARAIZUMI ART DAYS! 2021 ～相互作用～	2021 年 10 月 14 日～11 月 28 日 (1 か月半、月・火・水休業)	延べ 3000 人

◆ 2020 年：新型コロナウイルス感染症の影響を受けて：「**想像する展覧会**⁵」

この年、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、原泉アートデイズ!の開催の見通しがたたなくなってしまった。そのような状況においても、アーティストの活動や作品の展示・発信を模索した結果、新たに画期的な「**想像する展覧会**」という企画をたちあげた。この企画では、主に制作途中の作品を、郵送というアナログな手段によって「展示」し（計 4 回・月に 1 回）展示作品を受け取り側が「想像する」ことで、場所を移動せずに、あるいは新型コロナウイルスの感染のリスクを負わずに、日本全国どこからでも展覧会に参加することができるというものだった。先着 100 名で鑑賞者を応募したところ、非常に好評で 2 次募集含め 132 名の全国からの鑑賞者が登録した。

◆ オンラインの発信：

原泉アートプロジェクトは動画の撮影・発信も積極的に行っている。本件評価時においては、2 3 本の動画があがっているが、主に、アーティストと AIR について対談したポッドキャストシリーズと、アーティスト自ら作品を紹介する Artist Guide シリーズがある。また、2021 年にはアーティストのスタジオをライブ配信で 24 時間公開する「OPEN AIR SPACE」の取り組みも実施した。（<https://openairspace.jp/>）

⁵ **参加アーティスト**：中瀬千恵子、北見美佳、野々上聡人、水戸部春菜、銚井喬、ソノノチ、Haniel Wides
安藝悟、下田実来、Robin Owings、kiritsuaiko、Celeste Amparo Pfau

2. 事業評価の設計

本件評価は、アーツカウンシルしずおかの「文化芸術による地域振興プログラム」の助成事業を対象として実施される、詳細事業評価（濃い評価）の一つとして実施された。事業評価の設計は、評価結果の活用を促進させる意味でも、主たる結果活用者である原泉アートプロジェクトの羽鳥代表とアーツカウンシルしずおかの担当プログラム・ディレクターと協議を重ね、以下のようなデザインに基づき実施することとなった。

2.1 評価目的（何のための評価か？）

本評価は、下記3つの評価目的を達成するために実施する。

原泉アートプロジェクトの成果、特にアーティスト・イン・レジデンス（AIR）のプロセスと価値（成果）を可視化し、関係者や外部の関心層に広く発信する根拠を収集する。また原泉アートプロジェクトを実施することによって、関わった関係者の間や地域住民で起きた変化を明らかにする。原泉アートセンター設立後の持続的な展開に向けての提言を抽出する。

2.2 評価設問（評価を通じて何を知りたいか？）

本件評価は下記4つの評価設問に対して答える形で設計された。

- | | |
|----|--|
| 1. | AIRのアーティストが原泉アートプロジェクトでの滞在制作（AIR）で体験したこと、また感じた価値は何か？それが作品の質にどの程度影響（質を高めたり、変化させたり）を及ぼしたか？ |
| 2. | 原泉アートプロジェクトを4年間実施したことで、地域の関係者はどの程度変化したか？ |
| 3. | 原泉アートデイズ!の来場者（一般の人、アート関係者）が感じた価値は何か？ |
| 4. | 原泉アートプロジェクトを継続し、ひいてはアートセンターとして持続的に発展するにはどのような提言が抽出できるか？ |

2.3 評価の実施プロセス

主な評価作業と実施した時期を下記の表にまとめた。

実施時期	評価作業
2021年7月～9月	評価の設計
2021年9月	事業の成功している姿とセオリーオブチェンジの確認
2021年9月	第1回現地調査（AIR見学）
2021年10月	来場者アンケート調査（オンラインおよびオフライン）の設計と実施
2021年11月28日	第2回現地調査（原泉アートデイズ!2021の視察）来場者ヒアリング
2021年12月～2022年1月	オンライン ヒアリング調査
2022年1月6日、7日	第3回現地調査 地域の関係者ヒアリング
2022年1月	追加 オンライン ヒアリング調査

まず本件評価は実用重視の評価の原則をふまえ、評価結果の活用者の意向を十分に反映した評価デザインを採用するために、評価の設計は評価対象事業の実施団体原泉アートプロジェクトの代表である羽鳥祐子氏と評価発注者にあ

たるアートカウンシルしずおかの櫛野チーフプログラム・ディレクターと評価者の合同作業で進めた。評価の目的や評価設問等固まったあと、改めて評価対象事業の成功している姿とセオリーオブチェンジを確認し、目指しているアウトカムの言語化や確認を行った。この議論を踏まえて、初期アウトカムごとにその達成度合いを明確にし、評価判断をするうえでの基準となるループバック⁶も合同で策定した。

本件評価報告書は、前述の評価対象事業の実施団体と評価発注者と外部評価者の三者で進めた評価設計に基づき、外部評価者が、量的および定性的手段（文献調査、参与観察、ヒアリング調査、アンケート調査、等）を組み合わせる形で情報収集した結果を報告書として取りまとめたものである。各調査の項目は以下の表 3 にまとめる。

表 3 本件評価の調査手法と主な調査項目

調査手法	件数	主な調査項目
文献調査：		事業計画、過去の実績
ヒアリング調査：対アーティスト	7 名	事業を知った経緯、アート制作における変化と原泉 AIR で受けた影響等
ヒアリング調査：対地域住民	12 名	事業を知った経緯、事業との関わり方、地域での変化等
アンケート調査：一般来場者	13 名	原泉アートデイズ!を知った経緯、展示を観ての気づき、感想等
簡易ヒアリング調査：対一般来場者	5 名	原泉アートデイズ!を知った経緯、展示を観ての気づき、感想等

2.4 評価の制約

本件評価を実施するうえでの制約は以下が挙げられる。原泉アートデイズ!の来場者に関しての情報収集だが、過去に事業側でアンケート調査などを実施していなかったため、本年度の来場者のみを対象とした。また、原泉アートデイズ!の開催期間が1か月に延長され来場者が分散されたこともあり、評価者がヒアリングを実施するために現地調査に行った日時にヒアリングを依頼できる来場者の数も限定的で、実際にヒアリングを実施できた人数に影響を及ぼした（計5名）。最後に本件評価の一般来場者対象にしたアンケート調査だが、開催期間中にオンライン・オフライン両方で主催者側から記入の依頼をしたが、最終的に13名のみの回答を得た。

2.5 事業の成功している姿とセオリーオブチェンジ

事業評価を行う際、その評価の枠組みの根幹となるのが、評価対象事業が目指している成果についての事業者の見解だ。本件評価においてもこの見解を明らかにするために、まずアートカウンシルしずおかが本年度の助成先団体対象に実施したキックオフ・ミーティング（2021年5月22日）において、原泉アートプロジェクトの羽鳥代表が評価セッションにおいて描いた「事業の成功している姿」を起点として協議を始めた。

⁶ ループバックとはもともと教育機関などで、学生の学習目標の達成度を測る評価ツールとして使われてきたが、近年では、教育以外の領域における評価基準となるようなツールとして、活用されている。

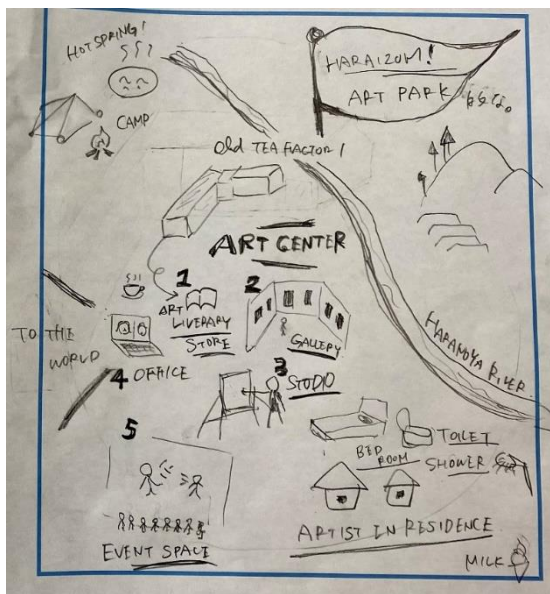


写真 3 原泉アートプロジェクトの「成功している姿」

左記写真 3 は、2021 年 5 月にアーツカウンシルしずおか主催のワークショップにおいて羽鳥代表が描いた、原泉アートプロジェクトの「事業の成功している姿」のイメージである。同事業の特徴であるアーティスト・イン・レジデンスが継続して行われている一方で、事業の地域での拠点となっている茶工場を中心に、①アートストアや②常設ギャラリー、③スタジオや④オフィス、そして⑤イベントスペースなどが設けられ、アートセンターとして確立している姿が描かれている。またその様子が世界にも発信されている様子がうかがえる。更に、アートセンターは、豊かな自然とキャンプ場や温泉等の地域資源と融合しながら、原泉アートパークというコミュニティを構成することを長期ビジョンとして掲げている。このビジョン達成のタイミングは当初具体化されていなかったが、事業の目指している方向性を把握することができる。

上記のイメージを長期ビジョンとし、現時点からそこまで到達するまでに必要な変化の連鎖について羽鳥代表と櫛野チーフプログラム・ディレクターと協議し、下記図 3 にあるようなセオリーオブチェンジとしてとりまとめた。

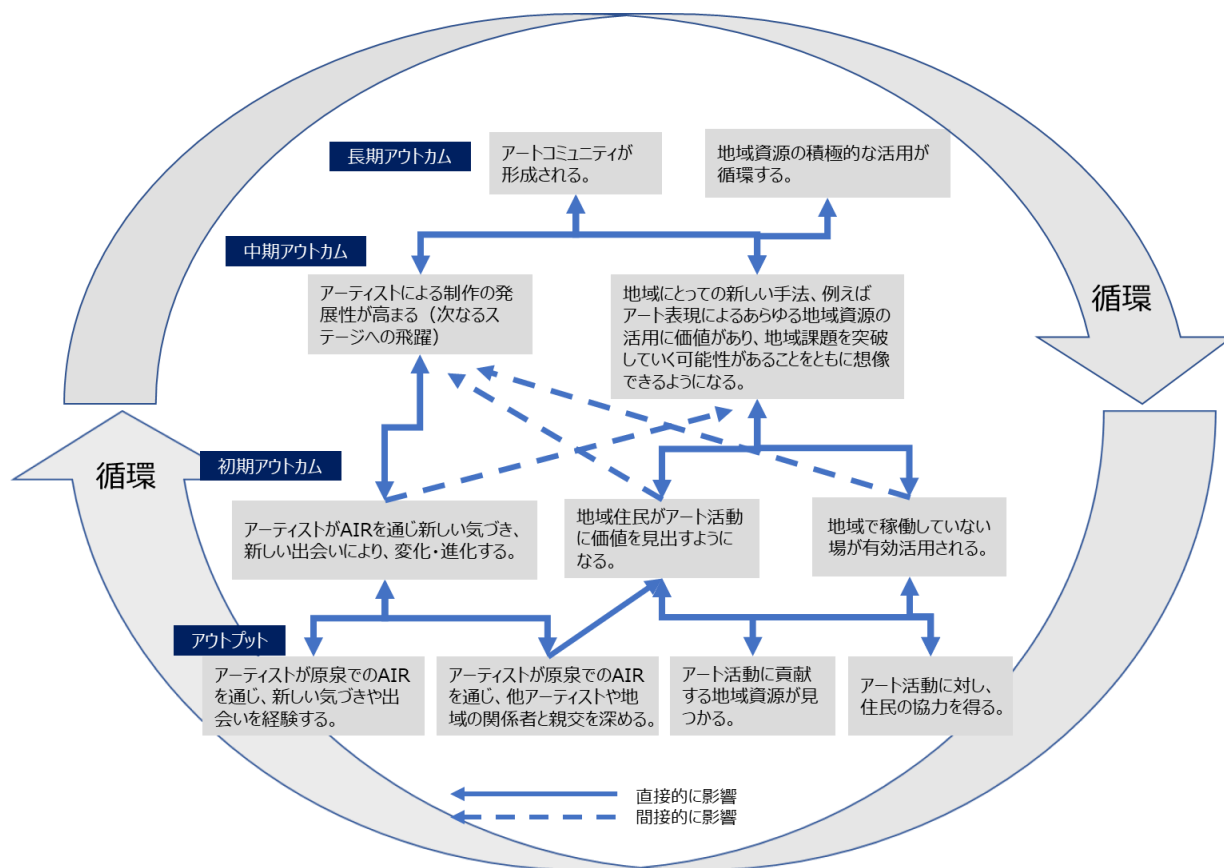


図 3 原泉アートプロジェクトのセオリーオブチェンジ

原泉アートプロジェクトのセオリーオブチェンジの特徴としては、事業が変化を起こす道筋として、主にアーティストの変化・進化と、地域住民の変化を中心にアートコミュニティを原泉地区にて形成していくことを主たる成果として掲げている。また、アウトプットから初期アウトカム、中期アウトカム、長期アウトカムという一連のリアな変化の連鎖で終わるというよりは、中長期アウトカムでの変化がまたアウトプットに影響を及ぼし、新たな変化の連鎖につながりながら常に循環しているというモデルであるという点だ。ここでは、「事業の成功している姿」の中心にあったアートセンターやアートパークは明示されていないが、最終的に「アートコミュニティの形成」というところで集約されると解釈できる。

3. 評価結果

本章から実際に収集したデータに基づき、各評価設問へ回答する形で、評価結果を述べていく。

3.1 アーティストが感じた価値と作品の影響

評価設問 1 : アーティストが原泉アートプロジェクトでの滞在制作（AIR）で体験したこと、また感じた価値は何か？それが作品の質にどの程度影響（質を高めたり、変化させたり）を及ぼしたか？

原泉アートプロジェクトの事業の中心に常に据えてあるのが、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）に参加するアーティストであり、制作される作品である。そのため、原泉アートプロジェクトの成果の一つとして、「アーティストが AIR を通じ新しい気づき、出会いにより変化・進化する」ことの程度を把握することで、事業の成果達成状況を判断できると考えた。この成果の達成度合を 4 段階の状態に整理したのが、下記の初期アウトカム 1 のループバックである。現状をループバックと照らし合わせて情報収集・分析をした結果、本件評価調査で結論づけられる達成状況は最も高い「**4. 達成できている状態**」に到達しつつあるといえる。

初期アウトカム 1 : アーティストが AIR を通じ新しい気づき、出会いにより変化・進化する。			
1. 全く達成できていない状態	2. 達成できていない状態	3. ある程度達成できている状態	4. 達成できている状態
アーティストが AIR を通じ新しい気づき、新しい出会いがあるけど、ただの体験で終わって、制作スタイルに変化が生まれない。	アーティストたちにとって新しい挑戦の場として、位置付けられる	アーティストにとって新しい制作スタイルが身についている。連続参加するアーティストがでくる。	アーティストにとって、原泉 AIR に参加することが、作家人生において大きな転機となる。

上記評価判断を下した根拠としては、ヒアリング調査を実施したアーティストから、原泉アートプロジェクトの AIR をきっかけに作家人生において、以下のような転機を迎えたとの情報を得られたところにある。

＜アーティストにとって AIR に参加することが、作家人生において大きな転機となった例＞

- ◆ 原泉に参加するまでは、絵画を中心に自分のスタジオで扱える小さなサイズの彫刻作品を制作していたが、原泉での制作をきっかけにスケールの大きい木彫りの作品を制作するようになった。その結果岡本太郎現代芸術賞の TARO 賞という大きな賞を受賞した。
- ◆ 屋外の風景を取り扱う演劇として風景演劇を始めたのは原泉がきっかけ。それまでは、劇場内での作品を手掛けていた。原泉の参加後は、他地域でも風景演劇を実施するようになった。
- ◆ 油絵中心の制作を行ってきたが、原泉アートデイズ！では、原泉で制作した作品に加え、その作品に来場者それぞれにストーリーを書いてもらうという展示を行なった。その内容をまとめて、一冊の絵本を制作。今後は絵本作家として活動することを検討している。
- ◆ 原泉に滞在するまでは、主に作家活動を中心に活動していたが、ご縁があってアート作品の制作にチャレンジした。その経験が、今後様々な表現の形を追求していく自信となった。
- ◆ インスタレーションという制作を初めて取り組んで、自信をつけたため、その後単独での個展を開いた。アーティストと場所の相互作用で、いつも素敵な作品が生まれる。原泉での経験はいつも、簡単にいえば、“life-changing”（人生を変える）

では、原泉アートプロジェクトの AIR の何が、このようなアーティストの作家人生における転機をむかえられるような変化を促したかについて掘り下げてみたところ、原泉アートプロジェクトの AIR ならではの仕掛けと、それに対してのアーティストたちが感じている価値がみえてきた。

仕掛けその 1：実績に基づかないアーティストの選定プロセスと新しい挑戦への奨励：

原泉アートプロジェクトの AIR は、公募によって選定されるのではない。最初からアーティストと対話して、AIR に参加してもらう上でのやる気や将来性、そして原泉地区の地域との親和性の視点等を中心に確認しながら、毎年のアーティストを招待しているというのが、本事業の AIR の特筆すべき点である。今まで参加したアーティストが AIR につながった経緯をきくと、一度参加アーティストの紹介や、羽鳥代表とのネットワークを通じての縁がきっかけとなっていることが多い。羽鳥代表としては、公募にしてしまうと、受賞歴等過去の実績をもとにした審査となってしまう、例えば制作したい分野での実績のないアーティストや、才能はあるが書類づくりにあまり長けていないアーティストを見落としてしまうリスクを懸念として挙げている。書類上に並べられた過去の実績や作品の計画書よりも、アーティストと事業側とのやりとりを通じての感触を信頼し、お互いの相性を確認することが、AIR の参加者を選ぶ大切な方法論となっている。

このプロセスの背景には、原泉アートプロジェクトが AIR を通じて、アーティストに今までの制作スタイルを保持するのではなく、新しい制作スタイルに「挑戦」することを奨励していることがある。羽鳥代表曰く滞在初日から制作活動において全てが決まっていて、最初から何もかもできるようなアーティストは選定していないため、AIR を通じてアーティストである彼らの才能を更に開かせることが、プログラムとしての価値だと指摘している。

<アーティスト側が感じた価値：ヒアリング結果より⁷>

- ◆ 原泉で制作したことによって、ジャンルがひろまった。挑戦させてくれたおかげ。殻をひとつやぶった感。自分が描きたいものをいつか表現したいと思っていたが、いきなり個展で描くのも戸惑った。羽鳥さんもその葛藤を知っていたので、後押しもあり、解放される。抽象的なものを書いてもいいんだとチャレンジできる。
- ◆ 各地域に移動しながら劇場で演劇することに疲弊していた。劇場だと短い間しかそこにいれない。自分たちの中に新しい風をいれたいと思っていたときに、原泉での滞在制作が決まった。AIR だと長い時間滞在して、（パフォーマンスの場所に）そこにいれるし、いつでもいける。朝もいける、夕方もいける、長い時間関われるということが、作品にも影響を与えている。お昼の風景・夕方の風景、風のむき、生き物、音等。
- ◆ 原泉にきたときにアーティストはみんな一皮むける。その時の熱量が面白いなあと思っている。作品づくりが停滞しているとき、伸び悩んでるときに…原泉での参加アーティストになることが決まった。

仕掛けその 2：新しい制作スタイルに挑戦できる環境の提供：

ヒアリング調査を行ったアーティストに、原泉アートプロジェクトの AIR での制作環境と普段制作しているアトリエ等の制作環境との違いを聞いたところ、まず物理的に、通常的环境では制作できないような作品に取り組めることで、作品の自由度が高まる点に言及する。豊かな自然からインスピレーションを受けたり、普段とは全く違うスケールの作品に取り組めたり、原泉地区ならではの素材を入手できたり、展示となる空き家・空き施設の特徴を活かしながら表現を変えていったり、日頃の制作活動におけるあらゆる制約から解放され新しいことに挑戦できる環境が用意されている。普段の生活だと「自

⁷ 本件報告書で表す「ヒアリング結果」は、ヒアリング調査で回答者から得た発言を、意図が通じやすいように若干校正したあと、記載したものとする。

分のアートが生活のせいで、小さくなってしまふ。」と発言したアーティストもいた。自分の日常生活を維持しなければいけないことそのものが、制作活動に影響を及ぼすことも意味している。そのような懸念もなく、大自然の中で自分の表現に集中できるのもこの AIR の醍醐味である。

このような制作環境がどの AIR でも提供されているかというと、必ずしもそうではないらしい。アーティストの中では、原泉アートプロジェクト以外の AIR を経験したアーティストは多くはなかったが、主催者側がアーティストやその制作活動に寄り添いながら、制作面でも生活面でもその細かい要望を丁寧に拾い、対応している事務局側のホスピタリティは、まさにこの AIR を唯一無二としている。特に、前述のアーティストに提供される食事もあるこの AIR の運用において重要な要素となっている。どんなに忙しくても滞在中のアーティストのために羽鳥代表自ら毎日毎日用意する 1 日 2 食の食事は、他のアーティストとテーブルを囲みながらほっと一息をつける憩いの時間であると同時に、自分の制作活動について語ったり、振り返ったりする機会にもなっている。

<アーティスト側が感じた価値：ヒアリング結果より>

- ◆ ここは自分にとっての開運スポット。今までやりたいし、やれる自信もあったけれど、環境だけなかったためできなかったものづくりが現実的にできるようになった。ここでのスケール感で作品が作れた。自分のキャパも広がった。
- ◆ 書く作業は東京でやったが、原泉では山歩いたり、川ずっとみたり、雨ふっているときは雨の音をずっときいたり、結構インプットしてました。そういうインプットを書いたメモは、東京でできたメモと、全然違う。モチーフが川とか自然という表面的なことだけではなく、書いてるもののテーマとか内容とかにかなり及ぶのかなという気がする。
- ◆ アーティストとして自分の時間。自分と向き合って、普段のディストラクション（雑音）を全部とりのぞいて、自然を毎日ずっと感じて、自分も感じて。もうちょっと自分がやりたいこととか、わかってきて、自分の自然ももうちょっとわかってきて。新しい opportunity（機会）も感じて。
- ◆ 自分が健やかな場所。食を囲んで話をするとき。心の開き方が違ったり、体験できたり、やっぱり確信できた。朝起きて、朝ごはん食べて、お昼食べながら、夜一緒に考えながら振り返る。ごはんの時間軸に。どういう場所で位置するか、大事。

仕掛けその 3：アーティスト同士の交流とインスピレーションのための場づくり機会づくり：

原泉アートプロジェクトの AIR のもう一つの特徴として、アーティスト同士の交流を促進させるための仕掛けが複数存在していることが挙げられる。例えば、「アーティストウォーク」は、アーティスト同士が自分の作品を紹介し共有し合える機会として企画され、アーティスト同士の交流を促進させるきっかけの一つとなった。しかし、仕掛けはまだ他にもある。

本報告書 1.2.1 にて記述があったとおり、AIR 中は食事の機会ごとにアーティストが集まるということを習慣化されているため、少なくとも滞在中は 1 日 2 回程度顔を合わせて、交流する機会が設けられている。また、食事以外でも、食事後の片づけや、滞在先のレジデンスや展示場所の掃除等もアーティスト同士が一緒に行ったりすることもある。このように、制作の場面や作品に関連がないところで接点を持つと、アーティスト同士がより気軽に交流できたり、お互いの進捗を確認しあったり、時には制作について語り合ったり、それがきっかけで互いの制作を手伝い合ったり、仲間意識の醸成にもつながる。このようなつながりを通じて、お互いが影響を与えあったり、インスピレーションを受けたり、それが作品に影響を及ぼしたりしていることが報告された。

<アーティスト側が感じた価値：ヒアリング結果より>

- ◆ 他の作家としゃべったり、その人が考えているのか、制作する姿勢。野々上さんがつくっている姿とかほれぼれする。その人の作風・考えたこと・しゃべったこと。そのものを取り入れるとちょっと恥ずかしいこともあるが。

- ◆ 制作に影響を受けたのは、他のアーティストと交流できる機会。創作していると他にも山場を迎えている人がいる。お互いのぎをけずっていく。他ジャンルであったり、そのとき向き合っているところが違ったりするが、でも同じことで悩んだり。ああ、がんばらなくちゃと思う。
- ◆ 他の方の影響、作品に対する対峙の仕方等学んだ。
- ◆ みんなで晩御飯を食べることは大事。例えば、他のアーティストに会いたかったら、そのアーティストの作品の前ではなく、晩御飯、掃除、お皿を洗うという普通のことを一緒にやっているから、いろいろなことを話せます。若いアーティストとして、もっと経験がある人と話すには同じポジションでないと話せない。すごく細かいこと、深いこと。インターアクション。家族みたいに一緒にいて、ゆっくり話ができる。

仕掛けその4：羽鳥代表による制作過程の伴走：

事業の中で AIR のアーティストの制作過程に最も直接的に影響を及ぼしたのが、羽鳥代表による伴走の要素だと考える。アーティストの個性に合わせて伴走の方法は多少変えているが、共通しているのがアーティストと対等に同じ目線で制作過程に寄り添い、適宜適切なインプットをいれ、支える。

<アーティスト側が感じた価値：ヒアリング結果より>

- ◆ 全部はダイアログ。羽鳥さんは「このほうがいい」とかはいわない。
- ◆ もともと執筆（伝える）の仕事が多い。どうやったら、伝わるかと考えるくせが抜けなかった。アートはそういうことではない。ここにいると、手放していくほうが大切と体験としてわかっていった。
- ◆ 作品に関しては、羽鳥さんは気持ちメイン。作品どうこうを積極的に伝えて、時間をとってくれた。作品のプロセスの中でも対話があった。作品が今どんな感じか見にもきてくれて、作品づくりながら、どこを会場にして設置して、自分の作品のイメージを話しながら気づいていく。こういう場所はどう？ こういう方向性もあるよね？ みたいな。

この伴走が最も顕著な形で行われたのが 2020 年の「想像する展覧会」だ。年度初めには、新型コロナウイルス感染症拡大のため、全国にて緊急事態宣言が発令され、同年の原泉アートデイズ!の開催さえ危ぶまれていた時期だった。全ての国内外の参加アーティストと、2 週間に 1 回のオンラインセッションを開始し、様々な制約の中、新たな制作と展示の方法を模索した。その結果、「想像する展覧会」という企画に至った。この時の羽鳥代表とのセッションやその場を通じて築かれた信頼関係について、言及するアーティストも複数いた。

3.2 原泉アートプロジェクトを実施したことによる地域の変化

評価設問 2：原泉アートプロジェクトを 4 年間実施したことで、地域・地域関係者はどの程度変化したか？

ここでは、上記評価設問 2 にある原泉アートプロジェクトを実施したことによる地域の変化を、「3.2.1 地域資源の有効活用状況」という側面と「3.2.2 地域住民がアート活動に価値を見出す」という二つの側面に着目して、それぞれ検証してみた。

3.2.1 地域資源の有効活用状況

原泉アートプロジェクトを 4 年間実施したことによって起きるべき地域の変化として、「地域で稼働していない場が有効活用される」ことを二つ目の成果、即ち初期アウトカムとして設定した。この成果の達成度合を 4 段階の状態に整理したのが、下記の初期アウトカム 2 のループリックである。現状をループリックと照らし合わせて情報収集・分析をした結果、この成果に関しての達成状況は「2. 達成できていない状態」であることが確認できた。なお、本事業においては、AIR や

原泉アートデイズ!実施期間中は、多くの稼働していない空き家・空き施設等の地域資源の有効活用が進み、アート作品と地域資源の融合に成功しているが、AIR やアートデイズ!期間外の利用、即ちこのループリックで掲げている、「アートデイズ!」の期間に限らず、いくつかの空き施設が年間としてアートに活用」されていたり、「アートセンター」が開設するところまでは、至っていない。

初期アウトカム 2 : 地域で稼働していない場が有効活用される。			
1. 全く達成できていない状態	2. 達成できていない状態	3. ある程度達成できている状態	4. 達成できている状態
一部の空き家が整備され、活用されている。	アートデイズ!の期間中にいくつかの空き施設がアートに活用されている状態。	アートデイズ!の期間に限らず、年間として、常にいくつかの空き施設がアートに活用されている状態。	地域の空き家を活用して、アートセンターを開設する

以下、具体的に原泉アートプロジェクトで活用された主な地域の空き家・空き施設・空地を以下写真とともに説明する。



旧原泉第2製茶工場（萩間地区）：

お茶の栽培が盛んだった原泉地区の茶業組合の2つ目の拠点として建設されたが、製茶工場の合併に伴い、施設が10年間使われず眠っていた。アーティストの制作場所やイベント会場として、また原泉アートデイズ!期間中は作品展示会場に加えメインの受付場所となり、ミュージアムショップなども併設している。



旧田中屋（泉地区）：

旧田中屋は空き家になる前は泉地区の中心地であり、唯一の店舗だった。駄菓子や簡易な生活用品が販売され、地域のお年寄りや子どもが集まって交流する場として機能していた。持ち主が亡くなってから、時折地域の集合場所として使われることもあったが、10年以上ずっと空き家となっていたところ、原泉アートデイズ!の作品展示場所および第2受付会場として重要な拠点となった。期間中は駄菓子も販売。子どもたちに喜ばれた。



旧掛川市 JA 原泉支部（大和田地区）：

こちらの建物も、閉所後に原泉アートデイズ!の協賛企業であるしばちゃんランチマーケットの柴田牧場によって買い取られ、柴田さんから建物本体を借りている。2018～2020 年までは受付会場として人々を迎え入れ、更にレジデンスとしても活用し、複数の作品が展示される会場となった。



昌光寺（萩間地区）：

萩間地区のこのお寺も、10 年以上前から廃寺となっており、本堂や様々な仏具まで、年によってはインスタレーションの一部として活かされながら展示されている。また、持ち主の住職さんの下、展示アーティスト他関係希望者で毎年坐禅会も開催してもらっている。（2019 年までは、一般来場者も集客して行っていた。）



居尻レジデンス（居尻地区）：

居尻地区のこの空き家も、持ち主が亡くなったことから空き家になっていた。亡くなった当時のまま、空き家となっていたので、アーティストやスタッフ、ボランティア一同となって、片づけや掃除をし、アーティストの滞在先としてのレジデンスおよび展示会場として活用されるようになった。



泉公会堂前ひろば（泉地区）：

2021 年度のソノノチが風景演劇を行った原野谷川をまたぐ耕作放棄地。複数の持ち主の区画をまたいだため、利用にあたり泉地区の区長に便宜を図ってもらい、全ての持ち主に対して許可をとったうえで、パフォーマンスの会場として活用された。



ツリーハウス（萩間地区）：

地区の有志で作ったものの、全く使われずにいた建造物で、地域住民の希望もあり 2018 年から毎年活用している。展示会場、イベント会場としてだけでなく、レジデンスとして活用したアーティストもいた。地区からは、今後当団体による積極的な活用の打診の依頼を受けている。旧原泉第 2 製茶工場からの距離が近い立地条件から、有効活用が期待できる場所の一つである。



ならここキャンプ場 回帰館（居尻地区）：

博物館として場内に設置されたドーム型の魅力的な施設。たまに繁忙期の雨凌ぎやワークショップに使うことがあるだけで、普段は物置と化していた。物の移動と掃除を重ね、展示を実現した。今後は、この場所をギャラリーのようにアート活動中心の場所として利用することが検討されている。

上記に加え、泉地区の旧原泉第 3 製茶工場、居尻地区の杉浦家廃バス、黒俣市有林、孕石報徳社、さくら咲く学校、ならここキャンプ場内バンガローなどの施設のほか、法之脇神社・孕石天神社の境内、大和田～孕石の県道沿い、萩間の風景、ビニールハウス跡（萩間）などの野外空間も事業で活用した。

これらの地域の空き屋・空き施設等の活用は、最初から必ずしも円滑に進められたわけではない。例えば、今は原泉アートプロジェクトのシンボルとなっている旧原泉第 2 製茶工場も、組織の統合後 10 年間空いていた施設ではあったが、建設当初は茶業組合が市からの補助金を使った建物であるため、製茶以外の用途で活用することが契約上不可能であった。ただ、地域の協力者と地道な交渉・調整を行いながら、単発のイベント開催や制作活動、そして本事業を通じて地域外にも原泉地区やお茶の宣伝を行っていることなどの継続的な取り組みが認められ、恒常的な利用の許可がおりた。製茶用の荷物がそのまま保管されていた工場を事業側が少しずつ片づけて掃除し、水や電力をひき、作品制作・および展示の場に仕上げていった様子を見て、他の空き家・空き施設においては地域住民の理解も進み、事業が比較的容易に活用できる状態になった。本件評価のヒアリング調査においても、このような地域で稼働していない資源が、「空いているところの活用は歓迎していると。そのまま埃だらけになるので、ある程度活用してもらったらいね。」と好意的な意見が多いことが確認できた。

本アウトカムの達成度合いを更に高めるには、AIR や原泉アートデイズ!開催期間以外で地域資源が、アート目的に恒常的に活用されている状態であることが掲げられている。2021 年 12 月に新たにそのようなイベント「HARAIZUMI

ART CAMP」が夜間のアート鑑賞と宿泊を楽しめるイベントとして開催された⁸。今後はこのようなイベント等様々な機会を通じて、地域資源の活用が更に進むことが予測される。

3.2.2 地域住民がアート活動に見出した価値

原泉アートプロジェクトを実施した結果、「地域がアート活動に価値を見出すようになる」ことを本事業の三つ目の成果、即ち初期アウトカムとして設定された。この成果の達成度合を4段階の状態に整理したのが、下記の初期アウトカム3のルーブリックである。現状をルーブリックと照らし合わせて情報収集・分析をした結果、本件評価調査で結論づけられる達成状況は「3. ある程度達成できている状態」であることが確認できた。

初期アウトカム3：地域がアート活動に価値を見出すようになる。			
1. 全く達成できていない状態	2. 達成できていない状態	3. ある程度達成できている状態	4. 達成できている状態
地域住民がアートに興味・関心はあるけれど、アートとは何か説明できない。	興味関心を持ち、精一杯アート活動を応援してくれる状態。	地域の中でのアート活動の存在が日常（当たり前）になり、自分たちの日常と並行して受け入れられるようになる。	原泉アートプロジェクトの発展に積極的に貢献してくれている状態。

本件評価調査においては、原泉アートプロジェクトに様々な形で関わっている泉区・萩間地区の区長を含む12名の地域の関係者にヒアリングを行った。地域住民の全員の意向を本件評価では確認できなかったが地域のアート活動に関しては、AIRによるアーティストの滞在や秋のアートデイズ!の開催も、「地域の中の景色のひとつ」としてだいぶ慣れてきた様子が語られた。また今後とも「できれば長く、趣向をかえて、やっていけばいいと思う。」「一番いいのは、3年～4年という補助金の制度を拡大して、もっと続けさせてもらえればこの地区としてもうれしい。」と、地域の中での存在として、アート活動が続けられていくことを望む声もいくつかあった。

もう一方で、原泉アートプロジェクト開催に関しての地域住民の反対する声、あるいは問題視する意見などの有無についてヒアリング調査に含めたが、今までそのような声や地域内でのトラブルは、少なくとも区長会などには挙がってきていないことが確認されたことは特筆すべき点である。

更に、実際にヒアリング調査から、地域住民が様々な場面で原泉アートプロジェクトを支えていて、その協力が年々増えていることが判明した。多くの地元企業や組織が原泉アートデイズ!の協力・協賛者として名を連ねているが、それに加えて事業側の要望に応えるような形で一般の住民も以下のような形で本事業の成功に貢献している：

- ・ AIR および原泉アートデイズ!において地域の空き家・空き施設・空地等の地域資源を活用のために便宜を計らい、無料で貸与
- ・ AIR のアーティストに必要な材料の提供や、作品移動の車両、チェーンソーなどの機材の使い方の伝授など
- ・ 原泉アートデイズ!開催期間中での受付案内業務（地区で募集したところ、何名かで対応）

⁸ 原泉アートキャンプホームページ： <https://haraizumiart.com/>

- ・ AIR にあらゆる食材の差し入れ（初年度より）アートストアで販売する緑茶などを提供

最後に、2021 年末から 2022 年にかけて、掛川市主催で原泉地区の振興計画策定ワークショップが地域住民の参加により開催された。下記図 4 がその結果をまとめた資料だ。本事業からは羽鳥代表がそもそもワークショップに呼ばれたことも一つの成果だが、原泉地区の振興計画において、将来原泉地区が目指す姿の中で「自然とともに生きる地区」「農林業を支える地区」「暮らしやすく、安全・安心な地区」「若者が住みたくなる地区」と並んで「アートあふれる地区」が挙がり、その姿の実現のために「アートのある街道」「アーティスト・イン・レジデンスの促進」「地域全体としての取り組み」「アートセンター開設」などの意見が採用された。このように地域住民の協議によって描かれた原泉地区の未来像の中でアート活動がはっきりと明示されているということは、原泉アートプロジェクトが地域の日常の中で受け入れられている状態の証拠であると考えられる。

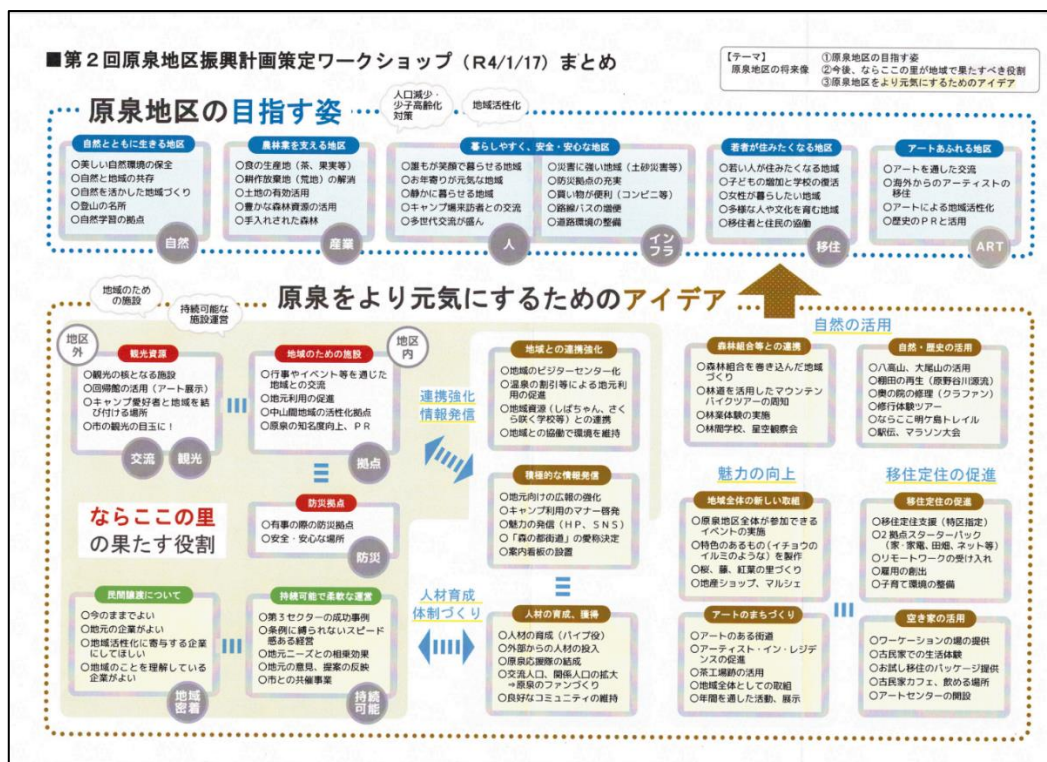


図 4 原泉地区進行計画策定ワークショップのまとめ

本件評価調査においては、前述以外に、地域住民がアート作品そのもの、アーティストとの交流、アートイベントを地域で開催することに見出した価値についてそれぞれ整理を行った。

価値 1 アート作品そのものに感じる価値

原泉地区で制作された作品に対して、地域住民がどのような価値を見出しているかという質問に対して、ヒアリング調査の回答者自身はアートデイズ!を手伝っている経緯から関心が多少あるため、印象に残った作品を挙げられると回答した。しかし他の一般の地域住民に関しては、一部興味のある人がいるかもしれないが、大半は「あまりよくわからない」「あまり関心がない」という印象をもっていた。

<地域関係者が感じた価値：ヒアリング結果より>

- ◆ ちょっとアートっていうことを理解できていない部分はあるんじゃないかな。椅子をああやって組んだもの、芸術っていつか芸術だけでもよくわからない。

- ◆ 地域のひとは（作品には）あまり興味はない。1度は来るがそれ以上は来ない。
- ◆ 地域で関心のある人は少ない。区長さんは駆り出されているが、興味のない人は全くない。
- ◆ どっちかといえば、悪くいうわけではないが、芸術家の人のパフォーマンスで、その人が見せたいわけで、だれもかれも、見に行きたいわけではない。でもそれをやって、たまたま興味がある人がいてどう感じるかであって。
- ◆ 風景を使って演じる人がいると、あそこはああいう風に使って、あのような表現ができるんだと感じた。私たちがみたただの風景と、作品を演じた人にはこうみえるんだな、ということはある。そのアートにふれて、ふとした写真をとったりしてみると、違った風景にみえる。言葉にするのは難しい、ただの風景がちょっと違ってみえる、というのはあった。

価値2：アーティストとの交流に関する価値

上記のアート作品に対して感じる価値とは対照的に、地域関係者はアーティストとの交流に関しては多岐にわたる価値を見出していた。地域外の人間に自分の地域のことに関心をもってもらったり、交流したりすることが喜びにつながっている様子がうかがえる。

＜地域関係者が感じた価値：ヒアリング結果より＞

- ◆ 基本的、田舎って田舎の中でしか完結しないというか、つながりがないわけで、それを羽鳥さんが色々なアーティストさんを連れてきてくださって、つながりが広がった。
- ◆ 滞在したアーティストと地区の交流。作品はお茶畑を表現した作品で、そこのお茶畑がどんな風だった、お茶をやっていたときはこうだったとか話をアーティストに（制作する過程で）おじいちゃんおばあちゃんがきかれたりして、話すのはとても楽しそうなことだった。
- ◆ アーティストと交流するのが好き。
- ◆ 交流するのは楽しかった。コロナがなければ、もっと親睦をもてた。
- ◆ アーティストさんという話をきいて、考え方がいろいろ変わりました。自分の中で昔からこうであるべき、これが普通と根強く考えてきたことが、アーティストさんとかいろいろな面白い方がいらっちゃって、自由奔放な、色々な方がいて。やりたいことを表現して出しているということは、私の中で今まであまりしてこなかったことなので、ああ、自分をあんなに出していいんだ。

価値3：アートイベントを開催することによって地域で感じる変化

原泉アートプロジェクトのような事業を開催することは、地域を外部者に開放することでもある。このようなことに関して、抵抗感を抱く地域も多くある中、原泉地区の住民は比較的前向きに捉えているようである。地域関係者がヒアリング調査で語った地域において変化は以下のようなものがあつた。その多くは漸進的で言語化するにも難しい変化の兆しのようなものだったが、確実に体感されたことがわかつた。

＜地域関係者が感じた価値：ヒアリング結果より＞

- ◆ お年寄りが多くなったり活気が落ち込んだりあるので、この地区も。そこが集まる少し明るい場所になったというかよかつたなと。
- ◆ 最初は警戒することもあるとは思いますが、アーティストさんが話しかけたり地元の話しかけたい人も話しかけたり、広がる、つながる。アートデイズ!で来場者が入ってきて、人がいっぱいいるね、にぎわうね、という感じ。一般的に散歩しているおばあちゃんがよくしゃべっている。1か月とにぎわう期間がのびてよかつた。

- ◆ 少しずつ、人が見えられたりして、にぎやかになっていく。まあその期間だけかもしれないけれど、少しでもこういった過疎地だもんで、違う空気が入ってくれて、違う面で活性化してくれればいいと思う。
- ◆ 個人とすれば、そういう新しい風が吹くと地域は様子が変わってくる。違う人がきて、展示をしたり、関わったり、誰かが見に来てくれる、というのは大事。50%以上は高齢者という地域。風が吹くと、活気づく。そういうのはうんと感じる。

ここまで、本事業に対して地域関係者が感じた価値や変化などについて言及してきたが、このような成果を促進した要因として以下 3 つ挙げられる。

促進要因 1：地域住民との地道かつきめ細やかな関係構築：

原泉アートプロジェクトの年間報告書（2019 年、2020 年）をみると、ほぼ毎月「地域との交流」という活動項目が含まれており、アーティストの挨拶回りから、地域のイベント（お祭り、清掃活動）の参加、周辺住民との交流等がしっかり事業の一部と認識されている。実際、地域関係者のヒアリング調査において、原泉アートプロジェクトや羽鳥代表について知った経緯をきいたところ、まず地域のイベントを通じて初めて知ったとか、ご近所つきあいしているから、という事業を超えた、地域住民というレベルでのつながりがしっかり構築されており、そのような関係性を土台に AIR や原泉アートデイズ！が実施されるため、地域住民の理解と協力を得やすい状況になっていることは特筆すべき点である。また、アーティストなどの外部者が地域に入ることも、「だいたいければ、羽鳥さんが『今度こういう人がきて、羽鳥さんのところ泊まったり、居尻に泊まったり、こういう人が来ますよ』という連絡があった。」と、頻度高く地域の関係者と連絡調整している点も、地域とのトラブルを防いで、信頼関係を構築するのに寄与している。

促進要因 2：地域の組織への参画：

羽鳥代表は、原泉地区へ移住しており、前述のように地域活動にも住民として積極的に参加しているため、関係者からの信頼も厚い。原泉地区のまちづくり協議会において欠員がでたときに、羽鳥代表に声がかかり、事務局長に就任した。毎月開かれるまちづくり協議会の運営を行い、原泉地区の区長会にも定期的に参加している。このような地域の組織に参画することは、原泉アートプロジェクトに関する情報共有も容易になり、まちづくり協議会や区長会などにも支援されている正当な取り組みとして地域に周知され、ボランティアを募集する際も協力を得やすい。こういった側面が、事業が地域に支えられやすい環境づくりに貢献したといえる。

促進要因 3：地域と事業の適度な距離感：

本報告書の 1 章に原泉アートプロジェクトの特徴として、「地域振興を目的としないアートプロジェクト」という点を挙げた。第 2 章の事業の成功している姿やセオリーオブチェンジにおいても、せいぜい長期目標において「地域のにぎわい」が目的として挙げられているが、本事業の長期的発展と原泉地区の振興をあえて分けて考えていることを示唆している。それは外部からきた事業として、地域の主体性を尊重する姿勢の表れであり、現場では、「事業と地域の適度な距離感」という関係性に表出する。この「適度な距離感」という言葉は、地域関係者のヒアリングで何回か言及されていて、そして、逆にその距離感がなかったら、今までのような地域からの協力関係を保つのが難しくなっていく可能性についても語られた。

「地域の人たちにプレッシャーほどではないけれど、お願いをするというのは僕は個人としてはあまりすすめない。あるものを利用して、ある場所を利用してというのは一行にかまわない。それ以上のことは負担感。負担になってくると、どうもあんまり長続きしないかもしれない。この地区では協力できないね、みたいなことになってきてしまう。」（地域関係者）

このように、地域関係者と十分関係構築をしながら、地域への便益、即ち事業を通じて見出される価値と、負担感のバランスをとりながら、事業を推進することは決して容易ではない。原泉アートプロジェクトはこのバランスをとることに長けており、結果地域に根づいた事業として、地域住民のサポートを得ることに成功した。

1.3 原泉アートデイズ!来場者が感じた価値

評価設問 3：原泉アートデイズ!の来場者（一般の人、アート関係者）が感じた価値は何か？

原泉アートプロジェクトのセオリーオブチェンジの中に、来場者についての記載はない。ただ、一般に公開されたアートイベントであり、アートデイズ!の来場者に何かしらの価値を感じてもらわなければ収益化も難しく、ひいては、本事業の持続可能性にも影響を及ぼす。そのことを踏まえ、一般来場者が感じた価値の確認は本件評価では重要と考えた。調査方法としては、本年度の原泉アートデイズ!期間中（2021 年度 10 月 14 日～11 月 28 日）に合わせて一般来場者対象のアンケート調査と現場でのヒアリング調査を試みた。しかし、評価の制約（3.4 参照）に記載したとおり、一般来場者からの情報収集においては困難が伴い、2021 年度の一般来場者（延べ 3,000 人）全体の傾向を推計するほどのデータの量を収集できなかった。実際に集まったデータはアンケート回答者 13 名分のデータとアートデイズ!で簡易ヒアリングが実施できた来場者 5 名である。限定的であるため解釈には留意が必要だが、来場者からみた本事業の価値について示唆する内容もみえるので、結果の一部を本報告書に含めることとした。

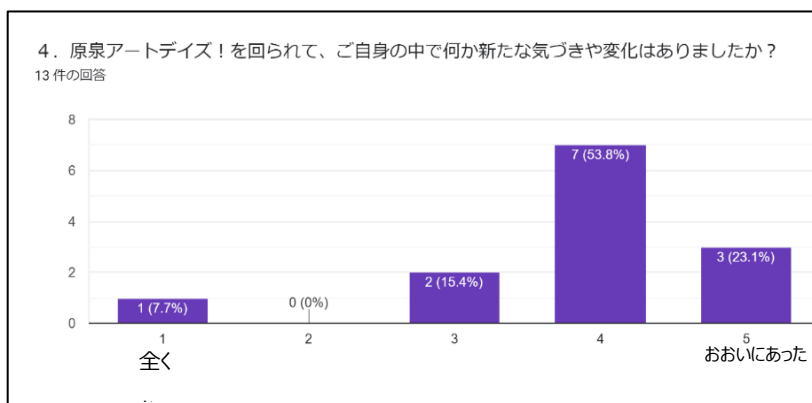


図 5 一般来場者が得た気づきや変化

まずアンケート調査のほうで、特に来場者が原泉アートデイズ!を鑑賞した結果「自身の中で新たな気づきや変化があったか」という観点から質問項目をたてた。結果を左記図 5 グラフに表す。回答者のうち約 10 名（77%）が、気づきや変化が「おおいにあった」、あるいは「あった」と回答した。また、上記設問の理由を記述してもらったところ、以下のような回答が集まった。アート活動の可能性や希望を見えたからというコメントや、アート

の見方の変化、たくさんの表現への気づきなどが促されたという反応が、一般来場者からも得られた。

<新たな気づきや変化の理由>

- ◆ アート活動の可能性
- ◆ 地域アートの希望を見た気がします
- ◆ 市内に住んでいても、こういう機会でもないと原泉まで足をのばすことはめったにないので、新鮮でした。
- ◆ アートの見方が変わった。

- ◆ いろんな感性、アイデアを知った。
- ◆ 色んなアート作品に触れて、たくさんの表現方法があることを知りました。
- ◆ 今年の「相互作用」というテーマを頭の片すみに置きながら各作品展示をみていると、自分なりに感じられる意味や普段には疑問に思わない当たり前に疑問や違和感を抱くような時間・空間だったと思うから。
- ◆ 普段目にするなんでもないものたち、当たり前に日々にある道具たちも、照らし方を変えれば何にでもなれるんだなと思いました。
- ◆ 色々な表現方法があるという事にも気づかされました。
- ◆ 素敵な作品たちだった！
- ◆ 自然の中に点在するアートを見て回れるのは、美術館の中を見て回るのとは違う楽しさがありました。とってもきもちよかったです。

更に、原泉アートデイズ!を鑑賞した先に地域やアートに関してどのような考えを喚起したかを確認するために、複数回答方式で、以下のような質問をした。その結果、アーティストや現代アートへの関心と同程度に、原泉地区自体のことや地域について関心が高まったことが判明した。

表 4 一般来場者の原泉アートデイズ!を鑑賞した感想 (n=12)

① 原泉地区のことをもっと知りたくなった	6	50%
② 参加しているアーティストのことをもっと知りたくなった	6	50%
③ 「持続可能な地域」について考えた	5	41.7%
④ 現代アートについて関心が高まった	5	41.7%
⑤ 地域資源の活用や地域の活性化に対し関心が高まった	4	33.3%
⑥ アートプロジェクトを（ボランティア、寄付などを通じて）支援したくなった	3	25%
⑦ アートを通じて自己表現をしたくなった	3	25%

上記のアンケート調査を踏まえて、評価者が原泉アートデイズ!の現地調査で訪問した 2021 年 11 月 28 日に展示会場に鑑賞した一般来場者で、簡易ヒアリングの協力者の回答を以下、表 5 にまとめた。非常に少ないサンプルであるに関わらず、各回答者が「いいと思った」ポイントがそれぞれまったく異なるところが、原泉アートデイズ!の来場者の関心の多様性を示している。また、もう一点注目すべきポイントは、必ずしも訪問理由が、現代アートを鑑賞したい、に限られてはいないところである。

表 5 原泉アートデイズ!の一般来場者の簡易ヒアリング結果⁹（2021 年 11 月 28 日分）

1. どこから来たか？	掛川市	森下	掛川市	浜松市	浜松市
2. 年代、性別、等	60年代～70年代の男性と女性。 男性は、旧田中屋のオーナーの同級生	60年代、男性	30代のお母さんと3人の子ども（男の子、女の子、幼児）	20代女性	30代女性
3. どういう経緯で原泉アートデイズ!を知ったか？	40年～50年前に原泉地区（旧田中屋の地区）に住んでいた。地域の行事に参加したとき、初めてアートデイズ!のことを知って、今回訪問した。	掛川の広報誌をみて、来た。4年前から毎年きており、今年だけでも10回は来ている。主に写真を取りに来ている。写真をとって、コンクールに応募している。	小学校に配られたお知らせをみて、夏休みのワークショップ（油絵）に参加した。その作品が、今回展示されるということで、また来てみた。	もともと原泉アートプロジェクトでインターンをしていた。今回は作品をみてまわっている。	アーツカウンシルしずおかの他の助成先団体に所属しており、他の案件にも訪問に行きますと言ってる割には、あまりいけていなかったため、今回はがんばってきた。
4. 何がいいと思ったか？	作品のことはよくわからない。でもこうやって、空き家が活用されて、人が集まるような仕掛けになっていることはいいと思う。	特に、パフォーマンスがいい。原泉の景色を背景にパフォーマーが映り、光と影の部分が映るといい写真がとれる。 じっくり作品をみながら、「写真」として創作的な視点を加えて、撮影できる。	子どもに、のびのびと絵を描く体験をさせられてよかった。しかも、この環境で。家とか学校とかでは体験できないこと。美術館とかでは（子どもに）注意しないといけなかったり、気を遣うし、子どもも窮屈。	川辺のスケッチがすごく気持ちが良くて癒される。 色々な年齢の人が一緒に楽しめるのがいいところ。	関西でのアートプロジェクトの実行委員を務めたときに、みなみりょうへいの作品に関わった。今回、原泉アートデイズ!に参加されるときき、ぜひ見たかった。

⁹ 一般来場者のヒアリングは、各展示場所で依頼できる人のみ、質問紙なども活用せず、情報収集した結果を、評価者が解釈してまとめたものである。

4.1 評価結果のまとめ

3章の「評価結果」で概観した通り、原泉アートプロジェクトの実施の結果様々な価値が生み出されていた。改めて原泉アートプロジェクトの成果（初期アウトカム）に注目すると、AIRプログラムの参加アーティストに関しては、「アーティストにとって、原泉AIRに参加することが、作家人生において大きな転機となる。」状態であり、稼働していない地域資源の有効活用の度合は「アートデイズ!の期間中にいくつかの空き施設がアートに活用されている状態」であることが確認できた。また、地域住民も「アート活動の存在が日常（当たり前）になり、自分たちの日常と並行して受け入れられる」状態になっている。これらの成果を促進させた要因は、対アーティストにおいてはAIRの実施においてアーティストの成長を促す様々な仕掛けが功を奏したこと、もう一方で、対地域住民においては、事業が地域住民と丁寧な関係構築を行い、適度な距離感を守りながらも信頼関係を築けているところにある。

これらの成果に加え、この事業の登場人物であるアーティスト、地域の関係者そして一般来場者も、本事業に関わることで、様々な価値を見出していることも本件評価で確認できた。特に地域の関係者においては、「アート作品そのものに対する価値」「アーティストとの交流における価値」「アートイベントを開催することによって地域で感じる変化」と三つにわけて分析し、アート作品そのものよりは、アーティストとの交流やアートイベントを地域に開催することのほうに地域住民が価値を感じていることを明らかにした。

原泉アートプロジェクトそのものを今後進化と深化させ、中長期目標であるアートコミュニティの育成やひいてはアートセンターの運営までつなげるには、引き続きこうしたアーティストや地域住民と丁寧なコミュニケーションを続けながらも、新たな関係人口も事業に巻き込み、サポートを得ることにかかっている。本件評価で整理したこの事業の提供価値や、成果を促進させている仕掛けや工夫等を本事業の強みとして意識し、関係人口の開拓にも活かされることが望まれる。

4.2 今後に向けての提言

評価設問4：原泉アートプロジェクトを継続し、ひいてはアートセンターとして持続的に発展するにはどのような提言が抽出できるか？

本件評価の結果を踏まえ、原泉アートプロジェクトを継続し、ひいてはアートセンターとして持続的に発展するためのという視点を中心に、事業に向けての以下4つの提言をまとめた。

提言1：地域住民に、アート作品の理解促進のための機会を積極的に提供し、地域住民の中でファンを増やす。

地域関係者が見出す以下3つの価値「アート作品そのものに対する価値」「アーティストとの交流における価値」「アートイベントを開催することによって地域で感じる変化」のうち、アート作品そのものに対する価値や魅力が、相対的に見出されておらず、住民の関心も低くとどまっていることが本件評価で判明した。でも従来、「アーティストの交流」や「アートイベントの開催」に加え「アート作品」そのものに触れることによって、地域住民のアートファンを増やすことができれば、地域にとっても住民の生活がより豊かになることにつながり、事業にとっても強いサポーターを確保できる、双方にとってよい結果になると考える。では、どうしたらもっとアート作品そのものの地域住民への提供価値を高められるか？ヒアリング調査から少しヒントとなる情報を得た。

<地域関係者から挙げられた、作品の提供価値を高めるためのヒント>

- ◆ 僕らにとっては、（パフォーマンス等において）なぜここがよくて、あれはどういう意味があるのか、みんなわからない。最後に盛り上がりを期待していたのに、それもなく終わりとなる。それが芸術かなと。
- ◆ （作品は）こんな感じのこういうものなんですという説明みたいなことがあれば「そうなんだ」となれる。こういうことを私は表現したかったとか、私はこう感じたんです。みたいなことが、言葉できいてもいいかなと思う。
- ◆ 2021年、10番で展示された「Preserved Food」について、アーティスト自身ではないが、アーティストの話を聞いた方を通じて説明をうけた。あの作品、最初それをみただけだと、アートを十分理解できない。説明をうけて。そうなんだなと思った。アートをただみるだけではなく、アーティストさんがどういう意味でどういう思いをもって作品をつくったか、をすることで、ただのアートではなく、アートに意味が与えられる。命が与えられる。もっときらきら輝いてみえると思いました。

一つのアート作品をどう見て、その表現をどう受け止めるかは個人差があり、それを一律に全員に対して変えるというのはなかなか難しい。しかし、前述の証言からは、「アート作品がわからない、理解できない」と敬遠しつつも、目の前の作品が何を表現しようとしているのかの意味付け・理解への導入を求めている声だ。制作者がどのような意図があったのか、どのような世界観をもって制作したのか、そして何より、原泉の何がそんなに作品に影響しているのか、この辺の情報があれば、アーティストの視点から作品をとらえて、新しい世界との出会いがあるかもしれない。

事業側もそのあたりを意識的に取り組んだ経緯もみられ、例えば YouTube 上のオンライン動画で、アーティスト・ガイドというものが 2020 年度の参加アーティストを中心に作成されている。アーティスト自ら、制作側の意図が語られたりしていて、見ると直接作品をみたいという意欲も深まる。しかし、地域関係者においては、特に高齢の方には「YouTube の動画をみてください」という手法では普及も難しい。

例えば原泉アートフェスティバル開催期間前に、地域住民だけを対象に AIR のアーティストによる作品ツアー・説明会を積極的に行う、あるいは、作品についてより詳しい情報（作品がどう原泉地区と関係があるかないか等）をパンフレットや展示情報に追記する、パフォーマンスなどにおいてはその後作品の背景や内容についての説明がある等、既に一部取り組んでいることではあるが、もう少し地域住民を意識した情報発信を行うことで、より多くの地域住民のアート作品への理解と関心が増えると思う。

提言 2：地域と世界が交差するアートセンターをめざす。

原泉アートプロジェクトの特徴の一つとして、毎年海外からアーティストを AIR に招待し、国内のアーティストとの交流やコラボレーションを実現できるところにある。それは新型コロナウイルス感染症の影響を受け始める前は特に顕著だったが、影響を受け始めた 2020 年以降においても、海外アーティストの来日が叶わずリモートでの制作活動を支援するなど、柔軟かつ効果的に進めてきた。

このように、海外のアーティストを AIR に招待し、制作活動をサポートできる体制がそもそも存在していることが本事業の強みと捉えると、この部分を意図的に拡大していくのもアートセンターの意義を高めていくことにつながると考える。例えば、本評価で確認されたような、アーティストと地域の相互作用によって産出された様々な価値は、多様なバックグラウンドを

もつ世界のアーティストたちをより多く巻き込むことによって、国内アーティストにおいても、地域においても、更に大きな変化を起こすことは予想できる。

新型コロナウイルスによる渡航制限の解除のタイミングにもよるところがあるが、次年度以降は原泉アートプロジェクトと互恵的な関係性を築ける海外のアーティストとのつながりを増やし、それに向けて積極的に情報発信を行い海外アーティストを AIR に招致できる体制を整えるのも、アートセンターの発展を促進させるきっかけになることが期待される。

提言 3 : 子どもとのコラボレーションを増やす。

原泉アートデイズ!では 2020 年には地元の小学校の子どもたちと作品づくり、2021 年には自然×アート×英語のワークショップという形で、子どもとアートのコラボレーションの経験もあり好評だった。もう一方で、掛川市にあるオルタナティブ・スクールの実りの泉の子どもたちは、ボランティアとして年数回通いながら、アートや地域の見方、関心などにおいて大きな成長を遂げた。実りの泉の子どもたちに関しては、逆にアートを制作することではなく、アートイベントを支えるという観点からの経験を通じて学びを得ていることが、注目すべきところである。

<実りの泉キッズが原泉アートプロジェクトに見出した価値：ヒアリング結果より>

- ◆ アート観が変わった。アートの見方や体感の仕方が変わった。最初見たときは、マインドが閉じていて、アーティストに質問ばかりありました。でも、今となっては、マインドが広がったので、よりアートも面白くなりましたし関心も高まりました。
- ◆ 原泉アートデイズ!を通じてアートの魅力を知った。そのまゝは現代アートとか見覚えがない。むしろマイナスな印象。原泉アートデイズ!に関わるにつれて、みたことのないものばかりで、もっと色々なものの見方が変わった。これがかっこいいとか、アートに対しての偏見が減った。
- ◆ 原泉アートデイズ!を知ってもらうために、掛川市内でちらしを配った。以前の私だったら絶対人見知りで、話かけるのが苦手だった。でも話かけにいけないといけなくて、言葉を変えてみたり、自然とうまくなっていった。ボランティアを通じて、人に話かける勇気がでた。
- ◆ 原泉をととして、ボランティアは自分の利益のためではないと知った。他人のため、人のために何かをしたい。他のスタッフの負担が減る、アーティストの制作を支える。作品を見るたくさんの人たちにも、みんなの幸せをつくること。
- ◆ 「ボランティアが誰かのため」事業の「やらしてもらうこと」 いろいろな場面で感じた。展示場所の片づけ、誰かのために、自分は、やらしてもらっている。自分も得ていると感じた。誰かのためでやりつつも、自分で得ている。掃除、受付。

このように、原泉アートプロジェクトと子どもたちとの相性は非常に良い。そしてそれは、必ずしもアート鑑賞、アート制作に限定せず、様々な関わり方からの成長の糧となる。対象は公立の学校などに限定せず、子ども関連施設、例えば学童保育所や児童館の夏休み企画をねらったり、中高の文化部活を対象としたり、週末の親子でアートを体験できるイベントを企画するのも、アートセンターの利用者を増やすきっかけとなりうる。アートを鑑賞するだけではなく、自ら体験したり、アートイベントを支える経験を積める場所として、子どもたちの今後の人生において何かしらの好影響を与えるような様々な機会を提供する。そして原泉地区、原泉アートプロジェクトに対して思い出、そして思い入れをもってもらえる将来の大人たちをより多く現行の活動に巻き込むことが鍵と考える。

提言 4：事業の発展的運営のためにも、事務局を強化する。

事務局のスタッフや事業運営のための人的資源については、原泉アートプロジェクトの 2019 年度および 2020 年度の事業実績報告書にあるように、既に課題認識を抱えており、「常時スタッフとして関われる人的リソースの確保」のために方策を検討している。この人材不足の点は、AIR のアーティストからも指摘されているところであり、本事業の更なる展開や価値創出を持続することの制約にもなってしまう、重要課題でもある。

現段階では、AIR プログラムから地域との連携、原泉アートデイズ!の開催準備と実施、広報という事業の運営面に加え、アーティストの個別制作過程の伴走や生活面でのサポート、まで全て羽鳥代表が中心となって進められている。そして、それゆえに羽鳥代表への負担が大きすぎて、業務を整理して他のスタッフやボランティアへ業務を分担してもらうための時間もとれないのかもしれない。もう一方で、原泉アートプロジェクトのファンは全国にいたるため、スタッフやボランティアの参加の仕方も、オンラインで遠隔で行う等、既に柔軟に検討し、現場では見えない人材が動いている側面もある。ただし、支援者は多くても、プロジェクトの性質上、現場最優先であるが故に、現場で事業に専念できる人材が複数名いることは、今後成長のメリットとなり得る。

組織にとって最適な人員配置はその組織ごとの特徴やリソースを踏まえて検討しなければいけないので、本件評価では具体的な提案はできない。しかし、今一度原泉アートプロジェクトを「事業」ではなく「組織」ととらえ、組織診断や基盤強化のためのサポートを受け入れることも必要ではないか。「羽鳥代表でしかできないこと」と「羽鳥代表でなくてもできないこと」の軸で業務の棚卸しをし、事務局としての優先事項と必要な人材のプロフィールを作成し、給与確保のための収入について検討する期間を設け、事業を一旦止めてでも、人材確保に注力することも、本事業の持続的発展に必要不可欠なプロセスであるとする。

■ 評価者と本評価の問い合わせ先

一般財団法人 CSO ネットワーク

中谷美南子（なかたに・みなこ）

minakonakatani@gmail.com